

聴 解 会 話 6

高橋 純子

Listening Comprehension and Conversation 6

TAKAHASHI Junko

時間：金曜4時限目 期間：2003年4月～6月

授業の構成及び活動内容の概要：授業は、2つの活動によって構成される。

- 1) 日本人学生と日本語学習者の小さいグループを作り、テレビ番組を録画したビデオ教材を聞き取り、内容を理解し、意見、感想を交換しあう。
- 2) その後、グループ内で、あるいはクラス全体の前での発表を1人2回する。

使用したテレビ番組録画教材：「情熱大陸 スーパーモデル 富永愛」(TBS)
「作法の極意 京都の作法」(NHK)

授業の狙い：聴解能力養成と会話力養成を限られた回数の授業で同時に満たす方法をさぐった。授業の始めに名簿作成も兼ね、学生の背景、他の登録クラス、学習者の要望等を探る学習者調査票(別紙参照)を作成、記入してもらった。学習者の日常生活での日本語習得に関する困難な点、日本語で何ができるようになりたいのか、何ができるようになることが必要なのかという点をさぐると、次の2点に集約された。

- 1) 日常会話が上手になりたい。
- 2) 専門の発表ができるようにしたい。

テレビ番組の録画教材を日本人学生と共に理解し、感想、意見を述べ合う過程とそのテーマに沿った発表をすることで上記学習者の要求に答えようと授業をデザインした。したがって、聴解力養成はビデオ録画教材の聞き取りとその理解。会話力養成としては録画教材をテーマに話し合い、それぞれの感想、意見を出し合う。そしてそのテーマに沿った発表をする、というものだ。

学習者調査票から見て来る学習者：授業の始めにどんな学習者が授業に参加しているかを

知るため、また1人1人の問題点や出席状況、課題提出状況、その他学習者の日本語習得に関して気がついた点などを記録するため上述の学習者調査票を配付し、記入してもらった。

母国で日本語を学習し、留学生センターで今学期から初めて授業を受ける学習者、1年の短期留学で今学期を最後に帰国する学習者、研究生、正規の大学院生などその背景は様々だ。このクラス受講以前にそれぞれ場所は異なるが、日本語初級文法は終え、その後中級の学習をしてきた者たちである。大学事務関係の問い合わせ、道聞き、教師への許可求め、依頼など、一通りのことはできているはずだ。「日常会話が上手になりたい」という記述は、毎学期よく見られるのだが、それは具体的に何を指すのかははっきりしない。

さらにどんな場面で日本人と話すのか、という質問に対して、学習者の多くがあまり話す機会がないと答えていた。この回答は、研究生、短期留学生、大学院生の順に多い印象を受けた。正規の大学院生になると研究室で日本人学生と話す機会が多くなるらしい。しかし、研究生は受験のための準備と日本語授業に時間を使い、なかなか日本人学生と接触する機会がない様子である。学習者の言う「日常会話が上手になりたい」という漠然とした欲求は、「話す機会がない」という訴えでもあると解釈できる。

「日常会話」とは何か：「日常会話が上手になりたい」という記述は何を具体的に指しているのかをさぐる必要がある。授業で直接学生に問いかけたところ、見えてきたのは、日本人と「おしゃべり」をしたい、というもののようであった。初級教科書にある「許可を求める」「依頼をする」「苦情を言う」「問い合わせる」などという機能別会話とはまた違ったものだ。これらの機能別会話では結果が出た時点で、例えば、許可を得られた時点、あるいは却下された時点で、会話は終了するが「おしゃべり」には、明確な終点がない。内容も多岐に渡る。何について「おしゃべり」したいと考えているのであろうか。学習者自身もその間にはっきりとは答えることはできない様子であった。「いろいろなこと」という答えであったが、まず、話す相手がいないという状況で、何を話せばいいのか見えてこないのは当然であらう。

翻って「おしゃべり」をするというのは、どんなことか検証してみると、以下のことが考えられる。

- (1) 共通体験に基づく意見を交換（噂話、映画や読んだ本の感想を述べあうなど）
- (2) 情報提供（料理の作り方、いいレストランの情報、旅行の報告など）
- (3) 冗談を言い合う（だじゃれ、揚げ足取り、からかいなど）

これらは必ずしもはっきり別れているわけではなく、それぞれ綾をなして行われているものだ。

学習者たちの置かれている環境を考えると、留学生センターに来たばかりで話す相手のいない学習者も多く、まして日本人学生と共通体験を持つ機会に恵まれることもサークル活動

でもしないかぎりそう多くはない。これは留学生に限ったことではなく、日本人学生にも共通の問題のはずだが、日本人学生の場合は自分は話下手だという意識はあっても、母国語の日本語会話が下手だという意識はないので自分の置かれた状況の問題と言語の問題を別にして考えることができる。留学生の場合は、そこを明確に分けて考えにくい面があるのではないだろうか。常に「日本語がまだ下手だから」と日本語習得の成果が話し相手の有無と摺り替えられてしまっている場合があるように見える。

つまり、今までで習った日本語を使って同世代の学生と話してみたいという欲求なのだと思える。教室での授業という形態では、どうしても教師と話すというフォーマルな日本語会話の型から抜けられない。教師の方は気さくに学生とおしゃべりをしているつもりでも学生の側からすると教師との会話はおしゃべりの範疇には入らないこともあるだろう。また、学習者に日本人の友人、知人がいて話す機会があったとしても、常にじっくり心おきなく話したと感ぜられるわけではない。言いたいことがあっても言いそびれたり、言葉を捜しているうちに話題が変わってしまっていたり、小さな不満がたまっている場合もあるかもしれない。

そんな学習者の「日常会話(=おしゃべり)」への意欲を満たすべく、学習者と日本人学生との交流の場を設け、体験の共有を図った。授業の枠の中ではあるが「おしゃべり」を積極的に授業活動として取り上げることにしてみた。

活動の詳細：授業 75分×10回

学習者2～3名に日本人学生が1名入るグループを5つ作る。日本人学生の参加状況と学習者の出席状況によって変動あり。

第1回目(1)グループを編成し、しばらくは自己紹介を含め、互いを知る為のおしゃべり。

(15分ぐらい)

- (2) 録画ビデオ教材「情熱天国 スーパーモデル 富永愛」を見る前にファッション関係の語彙、背景知識などについて、グループでタスクシートの質問に答えていくウォーミングアップ活動。(15分ぐらい)
- (3) 録画ビデオ教材「情熱天国 スーパーモデル 富永愛」の始めの5～7分を見る。グループ内での質疑応答。
- (4) 内容理解の質問シートを配り、質問事項の確認をし、再度ビデオ視聴、グループで解答を出して行く。
- (5) 質問に対する答えの確認と該当部分のビデオ視聴。
- (6) もう一度ビデオを視聴しながら覚えてもらいたい表現を含む部分の穴埋めタスクの入った聴解問題シートをグループで完成し、その意味の確認をグループで行う。

- (7) クラス全体で穴埋めタスクシートの解答確認と該当部分のビデオ視聴と確認。
- (8) 「今日の授業で学習したこと」(別紙2参照)という票に各自記入してもらい、授業を終了。

第2回目 (1) グループ編成

前回と同様のグループを編成するが、前回欠席だった学習者、この回新たに参加した日本人学生で新たなグループ編成を行う。

- (2) この回からの参加者との調整を図るため前回のビデオ内容についてクラス全体で確認。前回の授業でのビデオを見る。
- (3) 続きの録画ビデオ教材を視聴し、質疑応答しながら、グループでビデオ内容の確認。
- (4) 内容理解のタスクシートにグループで答えて行く。
- (5) クラス全体でのタスクシートの解答確認。
解答該当部分のビデオ視聴。
- (6) 覚えてもらいたい表現を含む部分の穴埋めタスクの入った聴解問題シートをグループで完成。
- (7) クラス全体で穴埋めタスクシートの解答確認と該当部分のビデオ視聴と確認。
- (8) 「今日の授業で学習したこと」(別紙2参照)という票に各自記入してもらい、授業を終了。

第3回目 (1) グループ編成。基本的には前回と同じグループで。

- (2) ビデオ教材の残りを第1、2回目と同じ手順で進めて行き、30分番組のビデオ録画教材を終了する。
- (3) それぞれのグループで内容について、感想、意見を交換する。
また各自の国のファッション事情、自分の好みなどについて教えあう。
- (4) 「今日の授業で学習したこと」(別紙2参照)という票に各自記入してもらう。
- (5) 次回、それぞれ人物紹介をすることを予告。
グループ内で発表するか、クラス全体でするか話し合う。
第1回目の発表はグループでしたいという学習者の意向を尊重しグループ内で発表することに決定。
日本人学生も人物発表をしてもらうことにする。
発表する人物は有名人でも個人的知り合いでも誰でもかまわないこととする。
発表の順番などは各グループで決める。

- 第4回目 (1) グループ調整。欠席者、日本人学生との人数調整など。
(2) 各グループで人物紹介。
学習者たちは、写真や紹介する人物の著作などを持参し、発表を開始する。
質疑応答を含む時間配分などは各グループで考慮するよう指示。
(3) 「今日の授業で学習したこと」(別紙2参照)という票に各自記入してもらい、授業を終了。

- 第5回目 (1) グループ調整。
(2) 引き続き、各グループで人物紹介。
(3) 「今日の授業で学習したこと」(別紙2参照)という票に各自記入してもらい、授業を終了。

- 第6回目 (1) 新たなグループ編成。
(2) 「作法の極意 京都の作法」を見る前に、語彙、背景知識などについてグループでタスクシートの質問に答えていくウォーミングアップ活動。(15分ぐらい)
(3) 以下、第2回目、3回目の授業と同じ手順でビデオ録画教材を使い授業を進める。
(4) 「今日の授業で学習したこと」(別紙2参照)という票に各自記入してもらい、授業を終了。

第7、8回目も同様にビデオ録画教材の理解を進め、第9、10回目で学習者の国の風俗、習慣、作法についての発表をする。日本人学生にも各自の出身地での風習、作法などについて話してもらった。グループでの発表を希望する学習者は第9回目の授業でグループ内で発表し、クラス全体での発表を希望する学習者については最終回に発表を行った。

評価：評価は以下の(1)～(3)に基づいて行った。

- (1) 人物紹介
- (2) 各自の国、出身地方の風俗、習慣、作法について話す
- (3) 自己評価票

授業時間外に学生との面接の時間を持ち、グループで行った人物紹介(1)と各自の国、地方の風俗、習慣について(2)再度話してもらった。学習者にとっては2回目の発表になる。さらに10回目の最終授業で学習者に記入してもらった(3)自己評価票(別紙3参照)をもとに評価をした。クラス全体の前で発表することを選んだ学習者については個別の面接

を希望しない限り行わなかった。

授業の効果：

(1) 語彙、表現の習得について

授業の終わりに学習者と日本人学生に毎回記入してもらった「今日の授業で学習したこと」の記述を見ると、学習者、日本人学生とも同様の語彙、表現を記入していた。ビデオ教材からの語彙と各グループで話題になったものが学習者、日本人学生、共通して書いてあった。特にビデオ教材の中に出て来る「雨が降ろうが槍が降ろうが」などの決まり文句などは殆ど全ての学習者、日本人学生が書き残していた。

これは、授業が終わった時点で覚えているもの、印象に残ったもののみ書けばよい、という指示を与えており、厳密にその日に学習した語彙や表現を書かせるものではない。従って、その日の授業で各グループで話題性の大きかったものがその用紙に書き込まれることになる。学習者の記述を見ると殆ど正確に語彙、表現、諺などが記してあった。

(2) 発表と評価のための面接について

人物紹介と風俗、風習、作法についての発表はビデオ教材が刺激となり、誰を、何をどのように紹介すればよいのか見当がつきやすかったようである。1回目はグループでの発表で、写真などがあつたら持って来て見せながらやったらどうか、という指示は出しておいたが、学生は小グループでの発表にもかかわらず、ハンドアウトを用意するなど教師の期待以上に積極的に取り組んだ。

グループでの発表、質疑応答を経験した上で、個別面接で再度教師の前で発表させた。1回目のグループ発表で日本人学生の助けを借り、適当な語彙や文型の選択ができ、2回目では、グループでの質疑応答の内容も付け加えて発表ができ、余裕を持って面接に臨めるはずだ、と予想していたのだが、その違いについては比べる手だてをもたなかった。学習者の様子から判断するとグループで複数の学生を相手に話す方が楽しそうであった。評価されている状況での発表では確かにあまり楽しくはないであろう。

はっきり観察されたのは、発音面で注意をはらっている態度であった。グループ発表の時に発音がはっきりしなくて聞き取ってもらえなかった言葉や表現について学習者が特に気をつけて発音しようとしている態度が見られた。

(3) 聞き取りと教材内容の理解

日本人学生と学習者の小グループで聴解授業を進めていくことの有利な点は、分からない表現や語彙などすぐ隣に座った日本人学生から説明を聞くことができ、その語彙や文型を使って学習者が自分で例文を作ったりしながら心おきなく確認できるという点にありそうだ。

黒板の前にいる、やや距離のある場所に位置する教師の説明とは違い、学習者のすぐ隣にいる日本人学生から説明が聞けること、分からなかったらその旨をすぐ伝えられる状況にあることが学習者にとって安心の様子であった。日本語の達者な学習者は他の学習者に説明してやることも出来、またその説明の日本語が正しいか、理解してもらえるものか日本人のフィードバックが即得られる環境がよかったということが学習者の授業へのコメントからうかがえた。

学習者の国籍はまちまちではあるが、日本語レベルが上がるにつれてどうしても漢字圏の学習者、韓国人学習者が多くなる傾向がある。気をつけても小グループを作るとどうしても同じ母語話者が集まってしまうことがある。そのグループで日本語で話しましょうと言ってもあまり説得力がない。まして、学習者が他の学習者に言葉の説明をするのにその日本語が正しいかどうか検証するすべがない。グループ内に日本人母語話者がいることで日本語で話す意味が出て来る。そのことが学習者の大きな動機付けになるのは言うまでもない。

予期しなかったこと：教材内容の理解において、教授者の意図が日本人学生にも伝わらない場合があった。「情熱大陸 スーパーモデル 富永愛」(TBS)のビデオ視聴で、ナレーション部分の説明は問題なく学習者も理解したようであった。しかし、モデルの富永愛が「モデルの自己紹介はウォーキングだ」と言い、自分の言った言葉がまさに的を得たものと彼女自身感心し「ね、今、私いいこと言った、ね、今いいこと言った」とインタビュアーに早口で言う場面がある。日本人学生にとっては、何も問題なく理解できるため聞き逃してしまった。

タスクシートには、「富永愛はモデルの自己紹介は何だと考えていますか。そして自分の考えに彼女は満足していますか」という質問項目があるのだが、日本人学生は、富永愛の「ね、私今いいこと言った、ね、今いいこと言った」の台詞の意味を問うているとは考えない。それが内容理解のためのポイントになっているとは考え付かない様子が観察された。ナレーション部分の説明を理解することが重要と考え、会話のちょっとしたやりとりの重要性には気がつかなかったのだ。

しかし、学習者にとっては、まず彼女が早口で言うので聞き取りにくいという問題から始まり、何を言ったかわかってもそれが会話の前後でどのような意味を持つのかまでは理解できない。日本人学生の方は「今、何かいい事言った」という台詞は学習者にとっては全て既習の表現であるからそれが理解の鍵になるとは考えず、問題として取り上げず通り過ぎてしまう。クラス全体で内容理解問題の答え合わせをしたところ、日本人学生からこの問題の答えがわからなかったという質問があり、再度その部分を聴取し前後との関係を理解させるということが起こった。

反省点と今後の授業への課題：

ある程度まとまったことも言えるようになり、日常生活の様々は場で困らなくなってきた。学習者たちが次に求めるのは、日本語での「おしゃべり」だったのだ。母国語では日常茶飯事に友人や家族と軽口をたたきあっていたのが、日本語ではまだそれが出来ていない。そしてその相手もない。相手がいないのは日本語力が劣るからではないのだが、学習者にとっては「日常会話が下手」だからということに集約されがちだ。「おしゃべり」ができるようになりたい、という学生の欲求は、ある程度日常生活に支障なく日本語があやつれるようになった学生にとって当然のものであろう。

しかし、「おしゃべり」を積極的に授業の目的にすることは、授業をする者にとっては勇気がいる。あるテーマについて話し合ったり、意見を交換し合うという活動はそれまでもしていたが、「おしゃべり」という観点から活動を促していたわけではない。「～についてグループで話し合ってみてください」「〇〇さんのグループはどんなことが話題になりましたか。みんなはどんな意見でしたか」のような指示や質問をし、何らかの結論を最後には導き出して授業を締めくくろうとしていた。初級のクラスの会話指導をする際には、何でもまず話して慣れることが大切だ、という考えから、どんなことでも積極的に日本語で話していればよし、としていた教師側の態度が中・上級学生を対象にすると硬化してしまうようだ。あるテーマをとりあげグループで話し合っている時に教師が「このグループはどんなことが話題になりましたか」と回って行くと学習者も「すいません、ちょっとおしゃべりしていました」と謝ることがある。そして、それに答えて教師も「ちゃんと話し合ってたね」と応対する。中・上級の授業になると「おしゃべり」をよし、として積極的に取り上げることはなかった。

学期の最後には評価し、成績を出す授業という枠の中で「おしゃべり」の場をどう演出すればいいのだろうか。「おしゃべり」なのだから日本人学生と学習者として勝手に話させておけばいいのだ、とは割り切れない。また授業を計画する者としてそれでは仕事を放棄しているような罪悪感におそわれる。また、授業の形態を維持するために、授業の成果を求めようとすると「おしゃべり」の自由さが失われるようにも思える。授業をする側の心理的葛藤も含む問題である。

「おしゃべり」の質、ということも考えておく必要があるかもしれない。高尚な話をすれば質が高い、という話題の問題ではなく、機知に富んだ話ができるか否かである。前述したスーパーモデル富永愛の「ね、今、私いいこと言った、ね、今いいこと言った」というような会話の中でのちょっとした受け答えや相手の言葉尻を捉え何か面白い気の利いたことが言えるか、冗談を理解し、自分でも使えるか、などだ。学習者は母国語ですると同じように会話のキャッチボールを日本語でも楽しみたいと思っている。会話を楽しめるかどうかは個人差も大きいですが、その域まで達すれば外国語を勉強してきたかがあると感じられるだろう。

今回の聴解会話授業では、「おしゃべり」の場と話題は提供できたと評価できる。今後さらに、「おしゃべり」をはずませるためにどんなタイミングでどんな冗談や軽口を言い合っているのか、客観的に観察し、データを集めておくことが役に立つはずだ。学習者が面白い、受けるはずのことを母国語での表現で言っても回りの者には通じず、しらけることがある。学習者も気の利いたことが言いたくてうずうずしているのだが、なかなかうまく行かない。面白い事をいったり、冗談を言ったりするのは個人の資質の問題として、練習してみるところまでは指導ができていなかった。漫才師が観客を笑わせるためにはギャグを何度も練り、練習しているはずだ。この領域にもう一步踏み込むことが必要であろう。

さらに、冗談や軽口で人を笑わせるのとは対極に、家族が病気だとか、ペットが死んだなど不幸なニュースに接した時の対応の仕方がわからない、という場合もある。学習者は自分の日本語力がないために何も言えない、とがっかりするのだが、「じゃあ、母国語だったらそういう時、何と仰うのですか」と尋ねると「何も言いません」と答えることもある。言語によっては、だいたい言う言葉が決まっていたりもするが、状況によっては万国共通人の心情として何も言えない場合もあるだろう。その辺りを客観的に判断できる態度も身につけてもらう工夫が授業でできるのではないだろうか。

そして、確かに、他の言語ではこういう場合には、こういう表現をよく使う、という決まり文句のようなものがあるが、同じ状況で日本語の場合には特に決まった表現がなく、何も言わなくてもいい、あるいは、何も言わない方がいい、場合もありそうだ。この「言わない」ということを伝えることも必要だ。言葉の授業は「言う」ことを学ぶのが基本であるが、「言わない」ことも学ぶ必要がある。

長期的展望になるが、私たちの様々な場面での「おしゃべり」に注意を払い、客観的に観察し、その構成要素を分析していくことが役に立つであろうと考える。そして、今回は詳しく触れなかったが、「おしゃべり」をしっかりした後での発表は、場を改めてのものかどうかという自覚が学習者の中でも明確になり、メリハリの利いた話し方になっている印象を受けた。よく「おしゃべり」をした学習者の様子はすがすがしく見える。「おしゃべり」の時間を持つことが学習者の中にある日本語を熟成し、育てて行くように観察される。目的に向かってまっすぐ進むのではなく、無駄に見える「おしゃべり」の果たす役割に注意を向けていきたいと考える。

別紙1 学習者調査票

名前： _____ 国籍： _____
筑波大学での身分：短期留学生 大学院生 研究生 研究員
日研生 _____ その他 (_____)

出席状況記入欄

宿題提出状況記入欄

今受講している日本語のクラス

文法 5 6 7 漢字 5 6 7 読解 3 4 5
作文 3 4 5 読解作文 6 7

今までに留学生センターで受講した日本語クラス

文法 1 2 3 4 5 6 7

漢字 1 2 3 4 5 6 7

読解 1 2 3 4 5

作文 1 2 3 4 5

会話 1 2 3 4 5

聴解 1 2 3 4 5

読解作文 6 7

聴解会話 6 7

その他 (_____)

留学生センターでの日本語授業は初めての人は、留学生センターで日本語の勉強をする前にどこで、どのくらい勉強をしましたか。できるだけ詳しく書いて下さい。

この授業でどんなことを学びたいですか。具体的に書いて下さい。

日本語をどんなところで、誰と話しますか。具体的に書いてください。

興味のあることは何ですか。

別紙2 本日の授業

【学習者用】

名前：

同じグループだった人の名前：

今日の授業での取り組みはどうでしたか。

積極的に発言した

例えば：

他の学生や日本人学生から学んだ

例えば：

あまり発言出来なかった

どうして：

次回に知りたいこと、発言したいことは？

今日覚えた言葉、表現は何でしたか。覚えているだけでいいです。

書いてみてください。

今日の教材はどうでしたか。

教材はやや易しすぎた（ ）

教材はちょうど良かった（ ）

教材はやや難しかったが、興味深かった（ ）

教材はやや難しかったが、協力しあって理解できた（ ）

難しすぎた（ ）

【日本人学生用】

名前：

同じグループだった人の名前：

今日の学生の様子はどうでしたか。

教材はやや易しすぎた様子だ ()

教材はちょうど良かったようだ ()

教材はやや難しかったが、興味深かった様子だ ()

教材はやや難しかったが、協力しあって理解できた様子だ ()

難しすぎた ()

本日の授業で学生からの質問はどんなことでしたか。

どんなことを学生は新たに学びましたか (教えましたか)

その他気がついたことを書いて下さい。

別紙 3 自己評価票

名前：

聴解会話 6 の授業での自己評価をしてください。

1. グループでの話し合いに積極的に参加し、いろいろな質問をし、自分の意見を述べ、提案をした。

例えば：

2. 発表のための準備をした。

例えば：

よって、私の成績は (A B C D) と評価します。

尚、出席率が 60% 未満の場合は自動的に F になります。

.....
以下は成績とは関係がありません。今後の授業の参考にしますのでご協力ください。

(1) 「情熱大陸 スーパーモデル 富永愛」(TBS) のビデオは

() 面白かった () あまり面白くなかった () つまらなかった

() 難しかった () 丁度よかった () 簡単すぎた

(2) 「作法の極意 京都の作法」(NHK) のビデオは

() 面白かった () あまり面白くなかった () つまらなかった

() 難しかった () 丁度よかった () 簡単すぎた

(3) この授業の感想を何でも書いてください。